一夏×オリ主 最終百合

銭湯妖精 島風

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界は1人の天才によって変化した・・・とか、そんな　あらすじは飽きたと思うので省略

この作品は、作者の思い付きと勢いで構成されています

タイトル通り試し書きです、ご意見募集しております

試行錯誤しながらなので、誤字脱字などがあると思います、ご了承下さい

目次

一夏　サイド　1
涼　サイド　4
天災　登場　7
検査結果　11
姉の登場　14
最初の試練　17
次なる試練　20
次なる試練　続　23
集合　前　25
集合　なか　28
集合　後　31
登校　33
学校　35
学校　その2　37
プロフ　作品開始時　39
学校　その3　43
五反田家　じゃぶ　45
五反田家　ストレート　47
みつだん　49
帰宅　51
体力測定　54
体力測定　に　56
織斑　一夏の憂鬱　58
黄金の大型連休　60

一夏　サイド

人は有史以来　平等で有った事は1度もない、これは姉の親友が言っていた言葉だ
確かに平等ではないのだろう、俺の物心つく前に両親は亡くなり唯一の肉親は姉だけだった
だから俺は両親の顔を写真でしか知らないし、両親の事は姉と俺達姉弟の里親をしてくれた人からしか聞いた事しかない
まだ俺は、俺達は恵まれている方なのだろう、と思う
だから、どんな困難も乗り越える事が出来る筈だ
例え、朝起きたら自分の性別が変わっていたとしても・・・

「・・・夢であって欲しい」
そう思いつつ自分の頬をつねってみると、痛みを感じる
つまり俺が女になっているのは、信じたくないが夢ではなく現実という事だ
寝起きで頭が回らなかったのと衝撃的過ぎて思考が停止していたが、徐々に現実を受け入れる事を決め頭を抱える
「なんでだ?昨日の夜・・・寝る前までは男だったのに」
明らかに昨夜から一晩で伸びた黒髪、そして存在しない筈の胸と消失してしまった相棒
一晩の内に全てが変わった訳だ
普通ならあり得ない事が起こっている、訳が分からない
混乱しながら、ふとデジタル時計を見ると時刻は午前9時を示していた
不幸中の幸いというのか、今は春休み中で相談するには非常識では無い時間だ
「よし、とりあえず相談だ、そうしよう」

何度も言うが、俺は今混乱していてマトモに考えられる状態に無い、なら頼れる大人を頼るしかない
と、考えて自室から頼れる大人が居るであろうリビングへ向かおうとした瞬間、我が家では聞いた事のない声が聞こえ乱暴にドアが開く音が聞こえてドタドタて階段を降りていく音が聞こえた
「千冬姉ではないな、間違いなく千冬姉じゃない。自分の姉の声ぐらい分かる」
自分でも不思議だが、さっきの声を聞いて逆に冷静になった気がしたのでズリ下がる寝巻きのズボンを掴んで落ちない様にしながら自室を出て階段を下りリビングに入る
そこには青みがかった髪をした美少女が立っていてキッチンには俺達の育ての親、獅郎(しろう)さんが立っていて呆然としていた
「どどどどうしよう父さん、女になってる。どうしよう」
青髪の娘は焦っている様子で獅郎さんに尋ねていて、獅郎さんは自分の頬をパシンと軽く叩き気合いを入れ
「大丈夫だ涼(りょう)きっと戻れる、戻れなくても絶対に味方でいるからな。一夏、お前もだぞ?」
そう言い、青髪の娘　改め涼の頭を撫でて、俺の頭のも撫でる
「え?一夏?うわっっ一夏も女になってる・・・千冬さんに似てるな」
獅郎さんの言葉に涼が振り返って俺を見て感想を言う
「そうか?えーっと・・・それで、何で俺って分かったの?獅郎さん」
涼には悪いが気になったので獅郎さんに尋ねると
「ははっ当たり前だろ、お前達は俺の家族だ。姿形が変わっても分かるさ、それが親って奴だ」
そう言い獅郎さんはニッとカッコ良く笑う
その言葉が胸を打ち無意識に涙が溢れてきてしまった、自覚していなかっただけで不安だったのだろうと思う
だが獅郎さんの言葉で少し心が軽くなった気がした
「大丈夫だ一夏、俺も同じだし、何より俺達は家族だ。辛い事も悲しい事も楽しい事も全て分け合ってきただろ?だからこれからもそうだ」
そう言って涼は俺を抱き締めて落ち着かせてくれた、が・・・こう

言っては何だが涼は自分が美少女になっている事を自覚するべきだと思う
中身は涼と分かっていても、見た目は美少女だから何から変な感じがして落ち着かない

とりあえず数分で涼が離れてくれたので獅郎さんを見ると
「落ち着いたな？さぁ腹が減っては戦も出来ないって訳で朝飯作るから顔を洗ってきたらどうだ？ついでに鏡で確認してくるといい」
獅郎さんの言葉に頷き2人で洗面所へ向かって割と広いので並んで歯を磨きながら鏡で確認する
鏡に映る自分の姿は、姉妹と言って差し支えが無い程に姉にソックリだった
違いは目の色と髪の長さ、姉より大分控えめな胸、と言った所か？
まぁアルバムの中でしか知らない実母の方に近いとも思える
「俺、母さん似だって良く父さんが言うけど今なら分かるわ」
そう涼は口をゆすいでから呟く
確かに涼は母親似だったが、今は余計に母親の面影を感じる
「でも杏子（きょうこ）さん、髪は大分長くなかったか？」
「確かに母さん、髪は腰ぐらいまであったな」
そう言い涼は肩に掛かるぐらいの自分の髪を摘む様に弄り懐かしむ様に笑む
その表情があまりに綺麗で思わずドキッとしてしまったが、直ぐに思い直す
目の前の美少女は美少女の皮を被った涼、義兄弟であり親友であり悪友の幼馴染、藤村　涼だ
だから変な気を起こしたらダメだ、男に戻れるかも分からない状況だから特に気をつけないといけない

涼　サイド

有史以来、人類が本当の意味で平等で有った事は一度もない。この言葉は知り合いが言っていた言葉だ
彼女の言葉は間違いではないのだろう、平等で有ったなら彼女の様な大多数の人間から見て異質と言われる存在は、産まれていないのだろうから
まぁ俺からしたら唯の知り合い・・・いや幼馴染の姉でしかないのだからどうでもいい、彼女は俺を弟の様に可愛がってくれるし
そして平等なら争いは起きないだろうが進歩も産まれる事も無いのだろう、と彼女は言っていた

さて現実逃避をするのをやめて現実をみよう
朝日が部屋に差して目を覚ましたのは良いが、色々と問題が起こっている
まず存在しない筈のモノが存在して、存在していないとおかしいモノが存在しないし、髪は伸びてるし体格が変わっている様で服がダブダブだ
「いやいやいや、夢でしょ?よし夢だ・・・」
俺は布団を被り直して目を瞑り夢ならば覚めてくれと願う、暫くして目覚まし時計のアラームが鳴り目を瞑りながら目覚まし時計を取りアラームを止め、体を起こし目を開ける
そして目に映る胸と青色の髪
「夢じゃない?いや何で」
昨夜寝るまで間違いなく俺は男だった
一晩で性転換なんてあり得るのか?いや、起こってるしな
「もう訳がわからん!」
思わず声が大きくなってしまったが自分のキャパを超えているので頼れる大人を頼る事にして寝巻きのズボンがずり落ちたので捨て置きTシャツだけで部屋の扉を乱暴に開けて出て階段を下りリビン

グに入り、自分の父親へ叫ぶ様に
「どどどどうしよう父さん、女になってる。どうしよう」
俺を見た瞬間、父さんは目を丸くして瞬きをして自分の頬をパシンと叩いて気合いを入れ
「大丈夫だ涼(りょう)きっと戻れる、戻れなくても絶対に味方でいるからな。一夏、お前もだぞ？」
そう言い父さんは俺の頭を撫でて、いつの間にかいた千冬姉似の美少女の頭を撫でる
「え？一夏？うわっっ一夏も女になってる・・・千冬さんに似てるな」
どうやらコイツは一夏らしいが外見は美少女でスゲェ可愛い
ここだけの話、俺の初恋は千冬姉だったりする
率直な感想を言うと
「そうか？えーっと・・・それで、何で俺って分かったの？獅郎さん」
余程　気になったのか一夏は父さんに尋ねると
「ははっ当たり前だろ、お前達は俺の家族だ。姿形が変わっても分かるさ、それが親って奴だ」
そう言い父さんはニッとカッコ良く笑う
父さんの言葉に一夏は少し俯き涙ぐむ、内心不安だったんだろう。俺は割と自分に無頓着らしく不安を感じてないみたいだ
「大丈夫だ一夏、俺も同じだし、何より俺達は家族だ。辛い事も悲しい事も楽しい事も全て分け合ってきただろ？だからこれからもそうだ」
そう言って俺は一夏を抱き締めて落ち着かせる・・・が　もう少し考えから行動すれば良かった
中身は一夏と分かっていても、見た目は美少女だから何から変な感じがして落ち着かない

とりあえず数分で一夏が落ち着いたのを確認し、抱き締めるのをやめて父さんを見ると
「落ち着いたな？さぁ腹が減っては戦も出来ないって訳で朝飯作るから顔を洗ってきたらどうだ？ついでに鏡で確認してくるといい」
父さんの言葉に頷き2人で洗面所へ向かって割と広いので並んで

歯を磨きながら鏡で確認する
鏡に映る一夏の姿は、姉妹と言って差し支えが無い程に千冬姉にソックリだった
違いは目の色と髪の長さ、千冬姉より大分控えめな胸、と言った所か？
でもアルバムの中でしか知らないが一夏のお母さんの方に似てる様な気もする
「俺、母さん似だって良く父さんが言うけど今なら分かるわ」
そう俺は口をゆすいでから呟く
俺は元々　母親似だったが、今は余計に母さんの面影を感じる
「でも杏子（きょうこ）さん、髪は大分長くなかったか？」
「確かに母さん、髪は腰ぐらいまであったな」
そう言い俺は肩に掛かるぐらいの自分の髪を摘む様に弄り懐かしむ様に笑む
小さい頃、良く母さんが千冬姉とか箒の髪を梳いていたっけ
母さんは保育士をしていて子供が大好きだった、事故で一夏と千冬姉の両親が亡くなった時も迷わずに里親志願して一緒に暮らし始めた
元気で明るく誰にも優しい自慢の母親だった、そんな人でも病気には勝てずに数年前に先に逝ってしまった
うん、そうだ
せっかく母さんの面影が有るのだから母さんの形見を使ってみようかな

天災　登場

歯を磨き顔を洗ったので父さんが待っているリビングへ戻ると既に朝食がテーブルに並んでいる状態だった
「さ、朝飯食べて　この先の事を考えよう」
いつもの場所に座り手を合わせから食事を始める
この先の事、性別が一晩にして変わってしまったのだから色々と考えなければならない
この先、自然に男に戻るのか否かも分からないが戻らなかった場合、戸籍に登録されている情報の修正が必要になるし、俺達は学生だ今は幸い春休み中だから良いが　いずれ学校へ行かねばならなくなる
だが性別が変わっているから、そのまま何事も無かった様に登校する訳にもいかない。下手したら研究所でモルモットの可能性だってある
、そして体格が変わっていて手持ちの服だとデカすぎて着辛いし、下着系統も買う必要が有るだろう
やる事は沢山有る
そんな事を考えながは朝食を食べ終え片付けた後、家族会議が始まる

「この先の事を決めよう、ん？」
父さんが口を開いた瞬間にピンポーンとインターフォンの呼び鈴が鳴って父さんが応対に出て数分せずにリビングに見慣れたお姉さんを連れてきた
「おはよ～って、アレ？おっかしいなぁ2人は男の子だったと思うんだけど、な？」
気紛れに遊びにくる　このお姉さんは篠ノ之　束、幼馴染であり千冬姉の親友であり、ＩＳの産みの親であり、現在進行形で全国指名手

配されている人だ
　そんな束さんが俺達を見て不思議そうに言う
「えーっと・・・なんか朝起きたら性別が変わってて」
「ふぅん、そうなんだ」
　俺の言葉に頷き珍しく真面目な表情になって腕組みして考え始める

　彼女が真面目な表情になるのは珍しい、俺が覚えているだけ４回ぐらいだと思う
　とりあえず長考状態の束さんは置いておく事にして仕切り直し
「これからの事、だったよね？どうしよう？」
「これから、か」
　どうするも何も、普通に生活していくだけなのだろうけど
「学校へどう話をするか、だな・・・起きたら男から女になってました、なんて与太話にしかならないからな」
「確かに」
「そこが問題か」
　父さんの言葉に頷き考える、さっきからブツブツと独り言を呟いてる天災なら戸籍の書き換えとか色々非合法な事も出来るのだろうが、父さんは一般市民だ
　在宅業である事しか分からないが束さんや千冬姉みたいにテレビを賑わせたりしないし、政府に圧力をかけたりも出来ない
　３人で頭を悩ませていると束さんが腕組みを辞めニコッと笑み
「よし、この天災　束さんに任せなさい！マルッと解決しちゃうよ、まず戸籍と学校の件は根回ししとくとして、最優先事項は２人の検査だね？　異常が無いかとか色々調べてみないと、元に戻れるか否かも含めて、ね？」
　と、言い何処かへ電話をして１分かからずに電話を切り
「検査の後は買い物だね、この辺は獅郎さんの担当かな？私は人酔いするから人混み嫌いだしね？」
「そうだな、分かった」

父さんは束さんの言葉に頷く
「それじゃ、後２０分ぐらいで迎えがくるから２人は着替えてきなよ、流石に寝間着のままだとね？」
そう言われ俺達は一旦部屋に戻り寝間着がら着替えるが、やはりブカブカで格好がつかないが仕方ないので諦めよう
多分、検査に行くだけだから着飾る必要も無いし
そんな感じでリビングに戻ると既に一夏は戻ってきていて、ジャージを着ていた
それから更に数分経って、ピンポーンと呼び鈴が鳴り
「来たみたいだね、行こうか」
束さんを先頭にリビングを出て玄関に向かい扉を開けると、銀髪の小柄（ロ）な美少女（エ）が立っていた
「準備は整っています」
「うん、ありがとうクーちゃん」
ニコニコと笑み束さんはクロエの頭を撫でて
「さ、行こうか。面倒な事は　ささっと終わらせるに限るからね」
そう言い歩み始め、如何にもな黒塗りの車に乗り込む
束さんの事だ、俺達にとって面倒くさいって意味で束さん自身は面倒とか考えてないのだろうな、身内に甘いし
とりあえず束さんに続いて黒塗りの車に乗り込み運ばれる事、２０分くらいで大学病院に到着する
「此処？」
「うん、木の葉を隠すなら森の中ってね？」
俺の呟きに答えた束さんの言葉に納得し、大学病院に入り移動しながら少し不安そうな一夏の手を握る
「大丈夫だって、どうにかなるさ」
「・・・ありがとう、涼」
一夏の気持ちも分かる、この数時間で色々有った訳だし検査して何か悪い物が見つかるかも知れないのだかは不安な気持ちが良く分かる

まぁ個人的には中身が一夏でも美少女は笑っていて欲しいだけなんだけどな、うん

検査結果

丸三時間を用いて様々な検査をした
時刻は１４時を指していてる、がお腹はそこまで空いていないので燃費は良くなったみたいだ
あと俺は注射が苦手だったりする、あの針が刺さる感触が苦手
と、言う訳で検査結果を聞く為に何か個室に通されて束さんと医者の先生がファイルみたいのを持って立っていた
「それじゃぁ２人は、その椅子に座って？検査を伝えるね」
俺達は椅子に座り２人を注目して固唾を呑む
「では検査結果を伝えます・・・あ、私は君達の担当医に任命された安心院（あじむ）です、気軽に　あんしんいん　さんって呼んでね」
安心院先生は俺達を安心させる為にニコリと笑み言い
「じゃぁ改めて、検査の結果を・・・結果だけ言えば、健康そのもので異常は確認されなかった、何の異常も」
「つまり２人が男の子で有った痕跡が残っていなかった、と言う訳だね」
異常が無かった事に安堵しつつ、完全に女になっていると言われ少し複雑な気持ちになる
「束さんから有る程度の事は聞いてるけど、検査結果を見る限りは君達が男の子で有った何て冗談としか言えない。結果だけ見れば君達は女の子だからね、血液検査や体組織の分析の結果を見ても　何処にも痕跡が存在しない」
安心院先生はファイルを見ながら言い肩をすくめる
「何か見つかれば手掛かりになったと思うんだけどね？今のままじゃ手の打ちようがないかな？　この辺りは私の専門じゃないからねぇ、元に戻す方法は模索してみるけど過度の期待はしないでね？」
んーと、つまり手掛かりがないから男に戻れる可能性は低いって事か？
なるほど、分からん

俺自身、男に戻りたいと思っているのか、曖昧な気がする
まぁなるようになるか
「ありがとうございます、安心院先生。異常が無いと分かっただけでも安心しました」
「俺も安心しました、生きていれば可能性も有りますし、前向きに生きて生きます」
ひとまずは元気になった一夏に少し安心し、やはり美少女は笑顔が1番だと感じる
「2人には私直通の連絡先を渡しておくね？」
と安心院先生は俺達に名刺を渡してくれた、そこにはメールアドレスと電話番号が書かれていたので直ぐに携帯に登録して、連絡先を交換する
「それじゃ何か異変があったら遠慮せずに連絡してね？フリーランスだから割と直ぐに連絡取れると思うからさ」
そう言ってニカッと笑み安心院先生は個室から出ていく
「それじゃぁ束さんも根回しとかしてくるね？クーちゃん、案内してあげて？」
「かしこまりました」
いつの間にか入室していたクロエに驚きつつ、彼女についていくと先程と同じ黒塗りの車が停まっていて車に乗ると
「それでは涼さん、一夏さん、また後日」
そう言ってクロエは手を振って見送り、車が走り出す
「・・・一先ずは異常が無くて良かった、いや今の状態が異常っちゃ異常だけど」
「そうだな、でも健康体なだけマシだと思う。男に戻れる可能性は有るって分かったし、どっちにしろ暫くは女のままだ」
そんな感じで雑談をしているとあっという間に家に辿り着いたので車を降りて運転手の人にお礼を言うと軽く会釈だけして走り去る
寡黙な人だったようだ、何か少しカッコいいかも

とか考えていたら父さんが出て来てドアに鍵をかける
「さ、さっさと服とか必要な物を買いに行くぞ？」
そう言い父さんは俺達の頭を撫でて歩いて行く、その背中を見てから一夏に目を向けると一夏も同じタイミングで俺を見ていたので同時に笑い、父さんの後を追う

帰ったら髪を切って貰おう、母さんが好きだった髪飾りをつけてみよう
いつだったか母さんが言っていた、俺が女の子だったら　もっと私に似てたのかな？って質問の答えはイエスだ
多分、母さんは女の子も欲しかったのかもしれない。うん、今からでも遅くないなら男に戻れるか分から無いけど、戻るまでは母さんが望んだ娘を磨こう
きっと母さんも、父さんも喜んでくれるから

姉の登場

父さんの運転するミニバン（くるま）に揺られる事15分、最寄りの駅に到着し疑問を感じて父さんに尋ねる
「父さん、此処から電車で移動するの？」
「ん？あぁ、俺じゃどうしても分からん事もあるからな。助っ人を呼んだ」
そう言い駅前の無料駐車場に車を停め携帯を確認して
「んじゃ、助っ人を拾ってくるから待っててくれ」
そう言い父さんは車を降りて早足で駅へ向かって行く
「助っ人か・・・誰だろ？」
「さぁ？束さんでは無いだろうし、クロエは束さんの所だろ？蓮さんか？」
俺の問い掛けに一夏は腕組み考えて助っ人の候補を口にする
ちなみに蓮さんは、俺達の友達の五反田　弾の母親の事で、見た目二児の母と思えないほど若々しい
「あ～、蓮さんか。妥当かも」
そんな感じで一夏と10分ほど助っ人予想を繰り広げていると父さんが帰って来てトランクを開き旅行バッグに入れ、久しぶりに会う義姉が紙袋を置く
「ち、千冬姉？なんで、ドイツに居るはずでしょ？」
驚きのあまり少し大きめの声で言ってしまうが千冬姉はキリッとした表情から柔らかい表情になって
「サプライズで休暇を取ってきた、と言えたら良かったのだが所用でな。本来なら顔だけ見て転職先へ行くつもりだったが・・・この様なサプライズが有ろうとはな、先方には話をつけてある暫くは家に居て可愛くなった弟達の面倒を見る事にした」
そう言いトランクの扉を閉めて助手席に座る
ちなみに一夏は驚き過ぎて固まっていた

「んじゃ改めて出発だ、行先は・・・去年出来たアウトレットモールだな。あそこなら大抵の物が揃うはずだ」
そう言い父さんは車を発進させる
「はっっっ千冬姉、ドイツでの教官の任期はまだ有ったんじゃ？」
漸く再起動した一夏が千冬姉に尋ねる
「あぁだが、任された連中の教育がすんなり行ってやる事が無くなったから繰り上げて日本へ帰って来た。転職の打診もあったしな」
あっけからんと千冬姉は言うが、そう簡単に帰って来れたら色々と問題になってなかった気もするが、俺には分からない世界だ、うん

「私の事を心配するより先に自分の事を心配しろ一夏、束が方法を模索しているとはいえ戻れるまでは女として生活せねばならん。先に言っておく、女は男に比べて大変だぞ？」
振り向いて此方を見ながら千冬姉は言う
それを聞いて俺は色々と想像する、確か女性は所謂　女の子の日があって人それぞれで重い人め居れば軽い人も居る
重い人はとにかくヤバイとか何とか
あと下着類も高いとか何とか
と考えつつ自分の胸に手を当ててみる、うん薄い
男の時に比べたら確かに柔らかいから有るには有ると思う
そんな事を考えつつ隣に座る一夏を見る
ジャージで分かりづらいが俺よりは有る、間違いなく
多分、同級生の平均より上の部類だと思われる
頑張れ一夏、俺は必要ないかもだが、お前には間違いなく必要だ
いや待てよ？そういえば母さんはデカイ部類だった気がする、つまり俺も成長する可能性が有るな、うん
よし、今の内に千冬姉に教えて貰おう、そうしよう

「そうだぞ一夏、いつ戻れるか分からない以上は女としての生活に慣れなきゃ。それに男と女、両方経験出来てラッキーぐらいに考え様ぜ？」

「・・・そうだな、大変だろうけど　それぐらい軽く前向きに考えた方が良いかもな」
　ひとまず一夏を励ますと、一夏もやる気になってくれたが俺達のやり取りを見ていた千冬姉の表情は微妙な表情をしていたが見なかった事にする
「まぁ塞ぎ込むより良いか・・・一夏、涼、今日は必要最低の事を教えるつもりだから、分からない事があれば聞け」
　口調が男勝りで表情が固いから勘違いされがちだが千冬姉は優しい、根がとても優しい
　それを俺達は知っているので笑んで頷く

最初の試練

車に揺られる事1時間、漸く大型アウトレットモールに到着し、駐車場が広過ぎる為　出来るだけ入り口に近い場所に駐車し降りる
「やっぱ春休みだから人が多い」
軽く伸びをして青空を仰ぎながら呟くと
「だな、これ逸れたら面倒になりそうだな」
と一夏がオレの呟きに返答してくる
「行くか、とりあえず千冬、順番は任せる」
「了解、ならば最初はアレだな」
肩を回しながら言う父さんに千冬姉は答え歩き出したので付いて行く

服とか必要な物って言ってたから何となくは分かる、若干言葉を濁してる感じだから下着だろう多分
確かに、この辺は父さんには頼れない部類だな、うん
そんな事を考えつつ千冬姉に着いてくること数分、女性下着類が売っているエリアに到着し
「千冬、流石に此処は居心地が悪いから適当にブラ付いてくる。支払いはコレでしといてくれ、くれぐれも自分の金を使おうとするなよ？」
そう言い父さんは財布からデビットカードを取り出して千冬姉に渡してエリアを脱出して行く背中を見て一緒に脱出したいと思ったが、無理な話である
だって俺達の下着を買うのだから
「・・・釘を刺されてしまったな、やれやれ」
千冬姉は苦笑しながら言い
「ではサイズを測る所からだな」
千冬姉は店員を呼び、サイズの計測を依頼し俺達は試着室に連行さ

れ服を脱がされて計測される
　これは中々に恥ずかしい、次からは自分で計測できる様に技術を身に付けよう、そうしよう
　計測自体は数分で終わり再び服を着て試着室を出て計測された数値の書かれたメモを仁王立ちで待っていた千冬姉に渡す
「2人とも御苦労、えーっと・・・涼はＡＡだな、あの辺りだな。一夏は・・・Ｃ、ふむ遺伝だな、うん。お前はあの辺りだ」
　そう俺達に指示を出す千冬姉
　それに従いサイズが書かれた場所に移動しメモを見ながら上下セットの下着を見てみる
「うん、さっぱり分からん」
　こうゆうのは何を選んだら良いかが分からないので腕組み考えていると、一夏に説明し終えたのか千冬姉が現れ
「やはりお前も分からんか、お前は一夏程悩まんでも大丈夫だな、一先ず・・・この辺りで慣れれば大丈夫じゃないか？このまま成長したら、この辺りのタイプに変えればいい」
　そう言い千冬姉はキッズブラとジュニアブラと書かれたタグが付いた下着を取り勧めてくるので
「じゃぁそれで、慣れたら都度考える事にするよ。ありがとう千冬姉」
　そんな訳でサイズが合う奴を3つカゴに入れると
「もっと必要だ、最低でも7組入れておけ。一夏　お前もだぞ」
　千冬姉の指示を聞き適当に返事をしつつ合計で7組下着を入れ一夏と合流してレジへ持って行く
「支払いはコレで、あと袋は別々にして下さい。あ、袋を追加で2枚欲しいのと、コレとコレは今着けさせるのでタグを切って下さい」

　やはり慣れているのか千冬姉はテキパキと会計を済ませて袋と今購入した下着1組を俺達に渡して
「よし来い着け方を教えてやる、涼が先だ。お前の方はすぐ済む」
　そう言い試着室に引きずり込まれブラの着け方をレクチャーされる、まぁあまり説明は無かったけど

流石にパンツを履き替える時は千冬姉には出て行った
さて一夏、頑張れよ
お前は俺より大変な筈だから
とはいえ、買い物はまだ始まったばかりなんだよなぁ

次なる試練

ブラもパンツも慣れていないから妙な感じがして落ち着かないが履いていたトランクスを畳んで袋に入れ服を着て試着室を出ると千冬姉は一夏を試着室に引きずり込む
なんか一夏の悲痛な声が聞こえたので静かに手を合わせおく
数分経たずに千冬姉が出てきて、再び数分で一夏がソワソワしながら出てきて
「なんか変な感じで落ち着かない」
「俺もだよ一夏、まぁお前程ではないけど多分」
２人して顔を見合わせて苦笑していると千冬姉が俺達の頭を撫でて

「まだまだ買う物が残っている、行くぞ」
そう言い携帯を確認して歩いて行くのでついて行く
数分歩くと自販機の横に父さんが立っていて合流し
「次は服か？それとも靴か？」
「先ずは靴にしよう、服を選ぶのに歩くだろうし」
と当事者を介さずに父さんと千冬姉が次の行先を決め
「次は靴だ２人共、ひとまず履きやすい靴を買うぞ」
そう言い千冬姉が歩き始め
「その内、外行きとかも買うが先ずは慣れてからだな」
と父さんはニッと笑み千冬姉に続いて歩き出す
「これは予想以上に買い物が長くなりそうだな？」
「あぁ、まぁこうゆうのもたまには良いんじゃないか？」
俺が一夏に言うと、肩をすくめて一夏が返してきて２人の後を追って歩き出したので、たまには悪くないか、と思い俺も歩き出す

そんな訳で動きやすさ優先でスニーカーを、通学用にローファーを

購入し服選びが開始する
　ちなみに靴は歩き辛かったのでスニーカーに履き替えている
「せっかく母さん似の美少女になったんだ、此処は思い切ってコレはどうだ？一夏」
　なんか振り切ってしまった千冬姉が一夏にスカートとかを勧め
「何言ってんだよ千冬姉、いきなりソレはハードルが高いって！」
　妙に必死に断る一夏を眺めつつ、バレない様に父さんと共に距離を開けて撤退する、その内　一夏が俺を巻き込むだろうし
　ある程度の距離を開けてから父さんに尋ねる
「ねぇ父さん、母さんって女の子が欲しかったの？」
　適当に服を眺めていた父さんは俺の方を見て
「女の子も欲しかった、が正しいな」
　そう言い俺の頭を撫でる
「・・・そっか、なら女になっちゃったし少し娘らしい事をしようかな？」
　そう言い微笑むと父さんはキョトンとしてから笑い
「無理してする必要はないが、お前がしたい様に生きろ涼、その為の手助けは幾らでもしてやる」
　そう言い再び頭を撫でてくれる
　父さんにとって俺は、俺達は性別が変わろうと家族なんだと、改めて認識して安心する
　安心したからか、余計に男に戻れなくても大丈夫と思える
「ありがとう父さん、で母さんって娘にどんな服を着せたかったと思う？」
「杏子か？あ～・・・」
　父さんは腕組み考え始め、移動を開始したので後ろをついて行く
「アイツ自身、動きやすさを優先してる事が多かったがロングのスカートとかも多かったな」
　そう言い父さんは懐かしむ様に服を見ながら呟く
「俺が杏子と出会った頃の杏子に涼、お前はソックリだ。ビックリす

る程に」
　と言い父さんはシンプルなワンピースを手に取り
「俺にはアイツが娘に着せたかった服は分からん、でも今　目の前に居るお前に似合う服は選んでやれる。昔、アイツが着ていた服をお前に教えはやれる、お前ぐらいの時にアイツが着ていたワンピースはこんな感じだったよ」
「そっか、ありがとう父さん。試着してみるね」
　ワンピースを受け取り試着室へ向かう
　悪い一夏、俺は割と悩まないかもしれない

次なる試練　続

試着室で父さんから受け取ったワンピースを試着する、慣れていなくて少し手間取ったが何とか着れたので試着室の仕切りを開ける
「どうかな？父さん、着方合ってる？」
「似合ってるぞ涼、コレもだな」
優しく笑み　そう言い父さんは白のリボンで俺の左サイドの髪を結う
「やっぱりお前にもソレが似合うな」
満足そうな父さんから一旦、試着室の鏡へ目を向けて確認すると母さんに更に似た俺と、その後ろに父さんが写っていた
「・・・ありがとう父さん」
「俺こそありがとう涼、杏子も喜んで・・・るか？息子が娘になっちまったからなぁ複雑な心境だろうが、まぁ前向きに元気ならアイツも嬉しいだろう」
途中で父さんは腕組み考え言い苦笑して言う
確かに手放しでは喜べない状態だが、母さんも俺達の性別が変わった所で変わらず愛してくれる、そう確信できる
「でも何か下が心許なくて落ち着かない」
「ははは、最初はそうゆう物じゃないか？」
父さんは笑って言い俺の頭を撫でる
とりあえず　そうゆう物という事にして一旦ワンピースから元の服へ着替えリボンも外す、父さんに昔の母さんの事を聞きながら服を選んで行き母さんが使っていたリボンに似た物を幾つかカゴに入れて一夏達に合流する
「くぅっっ」
何個か有る試着室に2人は居たのだが、服のせいか　ますます千冬

姉に似た一夏が顔を赤くしながら何でか俺達を睨んでくる
「似合ってるぞ一夏、どうせいつかは通る道だから」
一仕事終え満足気な千冬姉は放置し、思った感想を言うと一夏は更に睨んできて
「なら涼も着てみろよ！」
「え？分かった、千冬姉　選んで？」
そう千冬姉に言うと任せろと言い姿が消える
「・・・千冬姉って忍者だっけ？まぁ言いか、でも一夏　似合ってると思うけど、嫌なの？」
「・・・嫌、ではない。けど恥ずかしいんだよ！実の姉にグイグイ迫られて無理矢理着せられて！」
今にも泣き崩れそうな半泣きの一夏の言葉に少し同情する、千冬姉は大分振り切ってるし一夏の話を全く聞かなかったんだろう
「あ～・・・その、ごめん一夏」
とりあえず一夏に謝り数分慰めていると
「待たせたな涼!!」
いつになくキラキラしたオーラを出している千冬姉が戻って来て俺に服を手渡す
「あ、ありがとう千冬姉」
そのオーラに押されつつ一夏と入れ替わりで試着室に入り渡された服を広げて確認する
ブラウス、黒のノースリーブ？なジャケット、ロングスカートの組み合わせの落ち着いた感じだ
千冬姉自身、あまり派手な組み合わせを好まないからだろう
あまり時間をかけると一夏が怖いので、さっさと着て仕切りをあけると真ん前に千冬姉が立っていて一夏が目を丸くしていた
とりあえず千冬姉が満足そうでよかった

集合　前

あらかた買い物を終え最後に新しい制服を注文して帰宅して自室のベッドに仰向けに倒れこんで思う、酷く濃ゆい1日だった　と
慣れるまではバタバタとしそうだ、と考えつつ力尽きて床に置いたままの袋の群れを見る
「・・・模様替えもしないとな」
今まで着ていた服はサイズが合わないからしまって今日買ってきた服をクローゼットに入れなければ
朝からバタバタしていて流石に疲れているが、こうゆうのは　さっさと終わらせないと面倒臭くなって中途半端にしてしまうので身体を起こして服を片付ける
２０分ぐらいで入れ替えと収納が終わり、再びベッドに倒れ込むと自分で思っていた以上に疲れていたのか睡魔に襲われて負けてしまった

「涼、食事が出来たぞ？起きろ」
部屋のドアをノックされる音と千冬姉の声で目を覚ましノッソリと身体を起こし
「わかった、すぐ行く」
いつの間にかキチンと布団を被って寝ていたのを疑問に思いつつベッドから降り部屋を出てリビングに行くと妙に部屋が明るい事に気付き窓を見ると陽が挿していた
「・・・朝？え？」
「おはよう涼、夕飯の時にも起こそうとしたんだが爆睡して起きなかったから、布団かけて寝かせといたぞ？」
と軽く混乱している俺にサラッと言う父さんに感謝しつつ定位置に座り朝食を食べる
「俺は用事で出掛けるから、千冬２人を頼んだ」
「任せてくれ獅郎さん」

食後のお茶を飲んで、まったりしていると父さんが立ち上がって言い千冬姉は返事をして頷く
それを確認して父さんはリビングから出て行った
「さて・・・一夏、弾と数馬、鈴にウチに来るように連絡してくれるか？」
「え？構わないけど、何でだよ？」
ウチに何度も遊びに来ているから千冬姉も弾達と顔見知りだから呼び捨てなのは当たり前なんだけど、一夏には弾達を呼び出す理由が分からないらしい
「学校とかでの協力者とかでしょ？千冬姉」
「その通りだ涼、春休みの間は私が分からない事を教えたりフォローが出来るが学校が始まったら無理だからな」
真面目な表情で理由を言う
鈴だけじゃ手が回らない事もあるし、弾と数馬なら相談したり馬鹿話して気を紛らわせたり出来る訳だ
そんな訳で一夏はグループラインで３人を招集する
「とりあえず１０時ぐらいに集まりそうだ千冬姉」
「そうか、なら一夏　お前は寝間着から部屋着に着替えて来い。涼、お前は昨日そのまま寝ただろう？風呂に入って来い、ねぐ癖で髪が跳ねてるぞ？」
一夏の報告を聞き千冬姉が俺達に指示を出してきたので素直に従う
自室に戻り一式持って浴室へ向かい服を脱いで洗濯カゴへ入れ風呂に入りシャワーを頭から浴びながら呟く
「髪を切って貰うの忘れてたな」
あとで千冬姉に頼んでみる事に決め、いつもの様に済ませて風呂から上がり髪と身体を拭き適当に選んだ寝間着で水を飲む為にリビングへ行くと千冬姉がソファに座りテレビを見ていたてチラッとコチラを見て
「髪はキチンと乾かせ・・・いや、乾かし方からか。来い」
と、俺を洗面所へ連行して髪を乾かしてくれる

「ありがとう、千冬姉」
「構わん、お前も私の弟・・・今は妹か?まぁいい、血は繋がってはいなくても、お前は私の家族だ」
千冬姉は　そう言い微笑む
家族は血では無く心が繋がっている者だと母さんが言っていた
俺もそう思う

集合　なか

千冬姉に正しい髪の乾かし方を教えて貰い、部屋に戻って一式装備してハーフパンツとTシャツの組み合わせの部屋着に着替える
時計を見ると、数分で１０時になる所だったのでリビングへ降りると一夏と千冬姉が並んでソファに座ってテレビを見ていた
電気ケトルに水を入れスイッチを入れ２人を見る
元々姉弟だから似ていたが、今の２人は更に似ている。身長は千冬姉の方が高いし、身体つきも大人の女性だから全く同じでは無いけどとか考えつつ３人が来たら直ぐに飲み物を出せる様に準備をする

鈴には、まだ肌寒いし温まる物を用意するとして、弾と数馬にはオレンジジュースでも飲ませておけばいいか
千冬姉はブラックコーヒーだろうから千冬姉愛飲のインスタントコーヒーの缶と鈴と俺達用にココアの缶を棚から取り出す
１０時を少し過ぎた頃、インターフォンが鳴り千冬姉が応対に出て直ぐにリビングに戻って来て再び一夏の横に座る
一夏は　やっぱり不安があるのか顔色は少し良くない
「お邪魔します」
「お邪魔しまーす」
「失礼しまーす」

三者三様の声が聞こえリビングに３人が入ってきて目が合ったので
「いらっしゃい、ソファに座ってて?今飲み物だすから」
敢えて普段のまま３人に言うと３人は戸惑いながらソファに座り
「ち、千冬さん?あの・・・一夏と涼は?」

十数秒ほど沈黙していたが鈴が耐えきれずに口を開き千冬姉が口

を開く
「涼、買ってきた土産が茶受けに丁度良いだろう。出してくれるか？」
「えーっと・・・お土産ってコレ？」
オレンジジュースを取り出す為に、冷蔵庫を開いていた俺は如何にも　お土産な箱を手に取り千冬姉に見せると頷いたので、そのままオレンジジュースの容器と一緒に持って行き
「俺が涼だよ鈴」
そういうと鈴は眉を寄せ疑念の眼差しを向けてくる
まぁそれはそうだ、こんなの普通はタチの悪いドッキリと思う
弾は妙に納得した表情で数馬は一夏をガン見していた
それから全員の飲み物が揃った所で千冬姉が口を開く
「今から話す事は信じられないと思うが全て真実だ・・・まず見ての通り一夏と涼が女になってしまった、私の親友があらゆる手を尽くして調べたが原因は不明、不幸中の幸いに2人は健康そのもので異常は発見されていない・・・いやまぁ性別が変わっているから異常ではあるが」
そう言い千冬姉は3人を見据える
鈴は見るからに動揺し、弾は悟った表情、数馬は　まだ一夏をガン見していた
「俺は、信じますよ千冬さん。正直、千冬さんの横の娘を見た時から一夏かなぁとは思ってましたし」
と弾はニッと笑み言う
普段は　おちゃらけた雰囲気なのに　こうゆう時は格好良なる、所謂残念なイケメン、それが弾だ
「俺も信じますよ、千冬さんと似ている時点で血縁は間違いない。なら一夏と仮定した場合、骨格の変化が見られる。つまり一夏が女になったのは事実、となるわけで」
と数馬が言う、妙に一夏をガン見してると思ったら骨格を見てたのか
普段は弾と一緒にバカやってるけど、医者とか志望なのだろうか？

「・・・本当に一夏、なの？」
漸く口を開いた鈴の言葉を聞き一夏は、不安からか少し俯き加減で
やや上目遣いで鈴を見て
「信じてくれないのか？」
少し涙目で鈴に言う一夏を鈴は見て
「くっ・・・か、可愛い」
と鈴は演技掛かった仕草で顔を手で覆う
鈴、気持ちは分かるけどね、うん

集合　後

数秒して鈴が再起動して
「私も信じるわ」
「本当か、鈴。ありがとう3人共」
力強く鈴が言うと一夏は嬉しそうに言い笑むと
「うっっやっぱり可愛い」
と再び顔を手で覆う
いや確かに可愛いけどね？うん
「お前たちを呼び出したのは、フォローを頼みたいからだ。春休み中は　ある程度は私がフォロー出来るが、流石に学校が始まってからは四六時中とは行かん、私も転職先は此処から距離が有って通勤時間が長い」
千冬姉はブラックコーヒーを一口飲んでから口を開き、呼び出した理由を説明し始める
「悪いが学校にいる間の2人のフォローを頼めるか？特に鈴、お前に頼みたい」
と真面目な表情で3人を見据え言い頭を下げる千冬姉
「なに水臭いことを、言われなくてもフォローしますよ。千冬さん」
「右に同じく、俺も協力は惜しみませんよ千冬さん」
「だいたい分かったわ、任せて下さい千冬さん」
三者三様の言葉で了承してくれた
「ありがとう3人共」
「ありがと、鈴、弾、数馬」
「ありがとな」
友達に恵まれていて嬉しいと実感していると
「あの、千冬さん。質問、なんですけど」
「なんだ？鈴」
「男に戻れるんですか？2人は」
おずおずと鈴が千冬姉に尋ね、千冬姉は少し渋い表情をして

「・・・親友によれば可能性はゼロでは無い程度には戻れる可能性は有るらしい、とはいえ原因究明と戻る方法の画策は続けている。それが月単位か、年単位かは流石に私にも分からない」
昨日、東さんから聞いた内容を千冬姉は3人に説明し
「仮に安全に男に戻る方法が見つかっても、あまりに時が掛かった場合、男に戻らない　という選択肢も有るだろう」
これはあくまでも可能性の話だ
でも、女として不慣れな数ヶ月程度なら元の男に戻りたい気持ちが持続しているだろう
しかし、女としての生活に慣れて違和感を感じなくなるほど時間な立ったなら気持ちは持続していない可能性もある
結局は今は分からない事では有るのだけれど
「・・・分かりました、ありがとうございます」
そう言い鈴は神妙な表情をする
一夏は気付いてないけど、鈴は一夏が好きだ。勿論　恋愛感情の好きの方だ
と言うか、一夏はモテる。ただし本人は気付いていない
そう言えば弾の妹、蘭ちゃんも一夏が好きだったな・・・いや、蘭ちゃんの場合は憧れを恋愛感情と誤認している可能性も有るかも知れない
と、そこまで考えて弾の家がやっている食堂、五反田食堂の業火野菜炒めを食べたくなり、チラリと時計を見ると丁度昼時になっていた
「ん?もう昼か、よし呼び出した詫びも兼ねて昼は食ってけ3人共」
千冬姉は、そう言い立ち上がって冷蔵庫を開き中を確認して
「む、何もないな。仕方ない、出るか」
久しぶりに千冬姉の豪快な料理が食べられると期待したのだけど残念
とりあえず千冬姉の有無を言わさない雰囲気は凄いと思う、まぁ千冬姉自身は気を使ってるつもりなんだろうけど

登校

女になって約2週間が経ち、少し緊張しながら身支度をしている
クローゼットに付いている鏡を見ながらリボンで右サイドの髪を結う、春休みの間に練習したお陰でだいぶ慣れた
「・・・とうとうか」
真新しいセーラー服に袖を通し、変な所が無いか確認して呟く

大丈夫、鈴も弾も数馬もいる。春休み中に根回しをして学校にも話を通して顔合わせもした
だから大丈夫だ
それとは別に長期休みの後に学校に行きたくない心理も少量含まれてる
とりあえずスクールバッグを持って部屋を後にしリビングに入ると一夏が千冬姉に髪を結って貰っていた
「お待たせ、行こう?」
「おう、千冬姉、ありがとう」
「あぁ気を付けて行ってこい」
それから父さんと千冬姉に見送られて家を出る
桜の花が少し残っていて、見上げれ青空が広がっていて少し緊張が和らぐ
暫く歩き商店街に差し掛かると鈴と弾が並んで待っていた
「あ、おはよう2人共」
「おはよう、弾、鈴」
「おーす、何だ緊張してるのか?」
「おはよう一夏、涼」
合流して挨拶をすると、弾がからかう様に言う
「当たり前でしょ? あと長期休みの後は学校行くのダルくならない?」

と俺が返すと弾は笑い
「確かにダルくなるよな」
俺の意見に賛同してくれた、因みに一夏は俺達の後ろで鈴と話している
そこで、ふと思い出し一夏に聞こえない程度の声で弾に尋ねる
「そういえば、蘭ちゃんには？」
「・・・まだ何も」
結局、春休み中に蘭ちゃんに会う事が無かったので弾が伝えたかを尋ねると、弾は気まずそうに答える
「正直、なんて伝えたらいいのかが分かんなくてよ。兄貴としては妹の泣き顔は見たくないしな」
と困った表情で弾は言う
普段、妹に頭が上がらないのは蘭ちゃんが大事だからなのだろう
「気持ちは分かるけど、いつまでも隠せないし・・・ねぇ？」
そう、いずれは一夏が女になった事がバレる
五反田家に行かなければバレしない、でも不審がられるだろうから弾は問い詰められ自白するだろう
隠した時間だけ弾は酷い目に遭うのだろうから、バラすのは早い方がいい
「・・・しゃーない、今日は始業式とＨＲだけだから早く学校終わるし今日バラすか」
「そうだね、その方が良い」
傷は浅い内の方が良いだろうしね、一夏の為にも蘭ちゃんの為にも
今から蘭ちゃんの様子を予想して大分憂鬱になりつつ、学校への歩を進める
学校に着いたら着いたで絶対に騒ぎが起こる、女子は泣き崩れる人もいるだろうし、男子は喜ぶ人もいるだろう
美少女になった一夏に玉砕しにくる輩も出てくるだろうし
本当、朝から憂鬱な気持ちになる

学校

しばらく歩くと学校に辿り着く、道中同じ学校の生徒にチラ見されたのは、やっぱり一夏と鈴が美少女だからだろう
ちなみに入学式は明日なので、チラ見してくるのは同級生　又は一学年上の先輩達となる
「先生は一夏と俺は同じクラスにするって言ってたけど、弾達はどうかな？」
「わかんねー、さっさとクラス分け見てこようぜ？」
校門から進み途中の掲示板がある場所へ向かうと、見事に人で溢れていた
「うわぁ・・・」
「少し早めにきたつもりだったんだけどな・・・ナメてたわ」
目の前の光景に少し引いてしまい声を出すと、弾は苦笑して言い
「流石に俺もアレの中に入る勇気はないわ」
「アタシも」
と一夏と鈴も呟く
さてどうした物かと考えていると、人の群れから数馬が肩で息をして出て来て
「あ、丁度良かった。俺達全員同じクラスだ」
「そ、そう。それは嬉しいけど大丈夫？数馬」
なんか見るからに疲弊している数馬に尋ねと、大丈夫と言うので本当かよ、とか思ったが妙に視線を感じるので数馬から視線を外し見渡してみると、何人かと目が合って　すぐに逸らされる
それを疑問に思いつつ、玄関へ向かい靴箱に靴を入れ２年の教室が有る三階へ向かう
１年が２階、３年が４階で、１階に職員室や購買、保健室があったりする

地味に3階まで階段を上がるのはシンドイなぁとか考えつつ登りきり廊下を進んで2年3組の教室に入って黒板に書かれた席順を見て自分の席にスクールバッグを掛けて座って息をつき少し疲れたので机に突っ伏す

名前の関係で一夏とは席が離れてしまったが、比較的近くに弾の席が有るし、同じクラスなら休み時間にすぐに近寄れるから問題無いだろう多分

因みに席順は出席番号順で、出席番号は男女混合だ

弾や数馬、鈴の様に去年クラスが一緒だった人やクラスは違っても、知り合いの人がいる中で席順を見て明らかに男では無い女子生徒が藤村（俺の名前）涼が書かれた席に座っている、つまり何人かの視線が刺さる

俺でさえコレなのだから、一夏は数倍の視線が刺ささっているのだろう

そこまで考えて顔を上げると、真ん前に鈴の顔が有ってビックリしてしまう

「・・・鈴、ビックリするんだけど？」

「何よ、体調でも悪くなったのかと思って心配したのよ？」

俺の苦情に返答し俺の顔色を伺い

「一応、大丈夫そうね」

「・・・ありがとう」

そう言いニッと笑む鈴に俺を言う

鈴は見た目は可憐で性格は直情型で少し過激な所もあるだが面倒見の良い姉御タイプだ

故に、結構モテる

1年の時だって何度も告白されていたなぁ

学校　その2

教室の数カ所に固まって話しているグループの話し声に耳を澄ませてみると、やはり一夏と俺の話をしているのが聞こえる
春休み中に男子が女子になる、と言う摩訶不思議な現象を目の当たりにして憶測が飛び交っている様だ
織斑の同姓同名の親戚説、織斑が女装に目覚めた説とか色々、俺も似た様な感じで憶測がされているので割愛して
ひとまずは様子見をしているらしい、視線が刺さって落ち着かないが質問攻めにされてしまうよりはマシ、かも知れない
「今の所は一夏も大丈夫そうね」
「そうだね」
少し心許ないけど弾と数馬と言う壁役もいるし、しばらくは大丈夫だろう
まぁ女体化自体は秘密にする必要は無いけど、わざわざ自分から暴露しにいくメリットは無いから自主的に言い触らすつもりは俺は無い
一夏も、そのつもりの筈だ、多分
しばらくして始業の鐘が鳴り立っていたクラスメイトが席に座り始め、担任の先生が入って来てＨＲが始まる
「ＨＲを始めます、私は担任の皆城　芹です。１年間よろしく」
根回しした時に顔を合わせた先生が挨拶をする
担当教科はなんだったか忘れたが、束さん曰く信用出来る人らしい
交渉とかしたの束さんと父さんと千冬姉だけど
そんな訳で新学期恒例の自己紹介が始まった、頼むから変な事を言わないでくれよ？一夏
と祈っていると、すぐに一夏の番になって立ち上がり
「・・・織斑　一夏です、１年間よろしくお願いします」
俺の祈りが通じたのか、短いが無事に一夏は自己紹介を終え座る
それからクラスメイトの自己紹介が順調に進んで俺の番になった

ので立ち上がり
「藤村　涼です、1年間よろしくお願いします」
それだけ言って座る
それからは何も問題は無く進み
「では明日からの予定を伝えます、明日は入学式です。お昼からは新入学生との顔合わせがありますね。あぁ学級委員長と副委員長を決めないと行けない、2名には明日の入学式へクラス代表として出席して貰います、誰かやってくれる人はいますか？」
皆城先生はファイルを見ながら言う
学級委員長か、やりたくないな・・・まぁこうゆうのはやりたい人が出てくるものだから静観しよう、と様子を伺っていると動きが見えない
まぁ手を上げづらい雰囲気では有るけど
それから数分、皆城先生は様子を伺っていたが口を開き
「ん～困りましたね」
と、呟くと一夏が　ゆっくり手を上げ
「お・・・私がやります」
一夏は真っ直ぐ先生を見ていい、先生は一瞬　目を丸くしてから
「え？　・・・分かりました、では副委員長ですね」
俺の視界に映る鈴と弾、数馬が軽く頭を抱えているのが見えたが、俺は手を上げ
「副委員長、やります」
と言うと、鈴に軽く睨まれるが目を合わせ無い様にしておく
「では決まりですね、この後は休み時間を挟んで配布物を配ったりしますから、まだ帰らない様に」
そう言い皆城先生は教室を後にする
さぁて、鈴に怒られる覚悟をしておこう

プロフ　作品開始時

名前＊藤村　涼《ふじむら　　りょう》
年齢＊１３歳、中学２年生
性別＊女
身長＊１５０ぐらい
容姿＊薄群青色のミディアムストレート、右側の一房にリボンをしている

イメージ
目は青
備考＊
本作の主人公のオリ主
割と自分の事には無頓着なところが有り、一夏や家族の事を優先する事が良くある
一夏と千冬とは家が隣だった事も有って産まれた時からの付き合いの幼馴染であり義兄弟の様な関係
故に千冬の事は一夏同様、千冬姉と呼ぶ
作品開始時から数年前に母を亡くしている
現在は母親の若い頃に似ている為、娘が欲しかったかも知れない母の為に己を磨いている
身に付けているリボンは母親の形見だったり購入した物だったりする、基本的普段使いのリボンは購入品

ちなみに涼が産まれた際、男の子でさなく女の子だったらリョウでは無くスズになっていた
両親を尊敬し、２人の様な人間になる事を人生の目標にしている
またある程度は家事が出来る
名前＊織斑（おりむら）　一夏（いちか）

年齢＊１３歳　中学２年生
性別＊女
身長＊１６０ぐらい？
容姿＊マドカの目付きを少し良くした感じ、目の色は赤よりの黒
備考＊
原作の主人公であり本作ではヒロイン枠　または　第二の主人公
幼い頃に両親が事故死しており、里親の藤村家で育った為、養父の獅郎には普通に父親の様に接する為、タメ口で喋る
幼馴染であり義兄弟の様な関係の涼の不意の気遣いとかに不意打ちされて転性後は気が気では無い事が増えドキドキしっぱなしである
家事スキルがめちゃくちゃ高く主夫力がヤバイ
割と健康オタクなところがある、かも？
獅郎、杏子、千冬を尊敬していて人生の目標にしている

名前＊藤村（ふじむら）　獅郎（しろう）
ＣＶ＊藤原啓治
年齢＊３６
性別＊男
身長＊１７８㎝
容姿＊あご髭の似合う感じ？
備考＊
涼の実父で、一夏と千冬の養父
在宅業らしいが、何をしているかは不明（涼談）だが育ち盛りを余裕で食わせていけるだけの稼ぎはある
家族を第一に考える優しく強い父親で、女体化した涼と一夏を見て一目で２人だと分かった人
家の一切を仕切っているので家事スキルはＭＡＸ

名前＊藤村（ふじむら）　杏子（きょうこ）

年齢＊???
性別＊女
身長＊１６０cm
容姿＊涼に似た美人だった
備考＊
涼の実母で、一夏と千冬の養母だった人
数年前に病により他界している
性格は明るく前向きで優しかった（涼談）
生前は子供が好きだった為、保育士をしていた
一夏と千冬の両親が事故死した際、即決で２人を引き取る事を決めた人

名前＊織斑（おりむら）　千冬（ちふゆ）
年齢＊２２
性別＊女
身長＊１６８cm
容姿＊原作に準ずる
備考＊
言わずとも知れたブリュンヒルデ
原作と違い養父母が居た為、原作より雰囲気は鋭くないが不器用な為、よく勘違いされる
また一通りの家事をマスターしていて、涼曰く　豪快な料理を作る
涼を弟として可愛がっている、もちろん一夏も

名前＊篠ノ之（しののの）　束（たばね）
年齢＊２２
性別＊女
身長＊１６５cm
容姿＊原作に準ずる
備考＊
言わずとも知れた天才にして天災

原作より少し常識的で、原作以上に身内に甘い
涼的には親戚の　お姉さん的な立ち位置

学校　その３

皆城先生が教室を出て行って１０秒経たずに鈴が立ち上がり俺の方へ歩み寄ってきて
「・・・ちょっと来なさい」
声が明らかに怒っているので、素直に頷き鈴の後ろに付いて行き、一夏も同じように言って連行される
数馬と弾に助けを求め目を向けたが、無理とジェスチャーされたので断念した
とりあえず教室から少し離れた人気（ひとけ）がない渡り廊下に辿り着き
「・・・アンタ達、バカなの？」
声量は抑えていたが、力強く鈴は言う
「いやぁ・・・だって先生が困ってたし」
「俺は一夏がボロ出した時のフォローを、と」
俺達の言い訳を聞き鈴は溜息を吐き
「一夏、アタシもアンタのお人好しは知ってるし、間違い無くアンタの良い所よ？　でも、今のアンタに人の心配してる余裕は無いんじゃ無い？　アンタもよ、涼」
鈴は指を指し、俺達へいう
確かに鈴の言っている事は間違っていない、間違っては
「確かに　そうかもしれない、でも自分が助けになるって分かってるんだ、やる理由には充分だろ？」
一夏は真っ直ぐ鈴を見据え言う
自分で決めた事はやり通す、それは一夏の良い所だ、でも言い換えると一夏は頑固なのである
それは鈴も、よく理解しているので彼女は再び溜息を吐き
「はぁ・・・今更　学級委員長の変更も難しいでしょうし好きにしなさい、ただ　困ったら　すぐにアタシ達を頼る事、良いわね？　涼、アンタは一夏が無理や無茶しない様に監視とフォローをする事」
「おう」

「分かってるよ、鈴」
なんだかんだと面倒見の良い鈴の言葉に返答する
「そろそろ鐘が鳴るわね、戻るわよ」
そう言い鈴は歩き出す
「一夏、鈴も言ってたけど、困ったら人を頼る様に、自分だけで解決しようとするのは、お前の悪い癖だからな？」
俺より幾分かデカい一夏の背中を軽く叩き鈴の後を追う

まぁ同じ家で中で兄弟の様に育ってきた俺には一夏の挙動を見たら大体分かるけどな、うん

あとは弾と数馬にも改めてお願いしておかないと、一夏ってお人好しが過ぎて定期的にトラブルに巻き込まれたり、起こしたりするし

やれやれ、割と前途多難かも知れない
まぁいいさ、これはこれで飽きない人生って事で受け入れておこう

それから教室へ着くと、ちょうどチャイムが鳴ったので席に座ると数秒して皆城先生が入って来て
「では、配布物を配ります。教科書等は各教科の最初の授業で配りますから、今から配るのは時間割とかです」
そう言い皆城はプリント等を配り
「本格的に授業を始めるのは明後日からですね、配布した各教科で必要な物リストをよく読んで準備をしておいて下さい」

各教科でノート類の指定や必要な小物も有る様なので、帰りに買いに行かないと・・・あ、蘭ちゃんへの説明も有るか
まぁ説明の前に買い物済ませてしまえばいいか、うん　そうしよう

五反田家　じゃぶ

あれから特に問題は起こらずに無事、授業を終え皆城先生と明日の入学式について少し話をしてから学校を後にして、ノート類を購入して既に顔色の悪い弾を見て体調を心配する一夏と　これから間違い無く起きる悲劇を知っている俺は一路、弾の家へ向かう

数馬の家は学校を挟んで反対側なので一旦帰宅してから合流する事になっていて、鈴は用事が有ると言って足早に帰って行った

つまり蘭ちゃんを宥められるのは、俺だけなのだ

一夏が宥めたら絶対逆効果だし

「あー・・・着いてしまった」

物凄く家に入りたく無さそうな表情で家を見上げる弾の背中を軽く叩き

「・・・出来る限り、フォローすっから。ほら、一夏じゃ逆効果だろうし？」

「・・・だな」

俺達のやり取りを見て首を傾げている一夏を見て、やっぱり分かってないな　と考える

弾は深呼吸して気合いを入れて自宅の玄関を開け中に入って靴を脱ぎ階段を上っていく

俺達も弾に続き、おじゃましまーす　と言いつつ勝手知ったる五反田家に侵入して階段を上がると弾は蘭ちゃんの部屋の扉をノックしている所だったので弾に部屋に入るとジェスチャーして弾の部屋へ入り、いつもの様に勝手に座布団を敷いて座る

蘭ちゃん、泣くかなぁ・・・泣くよなぁ・・・

数分経たずに弾と蘭ちゃんが登場し

「お、お兄が鈴さん以外の女の子を家に!?　まさか、彼女?!　いや２人居るし・・・二股？　」

約一月(ひとつき)ぶりに会う蘭ちゃんは予想斜め上の事を言い、弾をジト目で

見る
その様子を見て苦笑しながら気になった事が有ったので立ち上がり蘭ちゃんの前に立って自分と彼女を比べてみる
「あーやっぱり、今は蘭ちゃんの方が少し身長高めか」
え？　みたいな表情を蘭ちゃんにされたが、いきなり暴露はハードル高すぎると思いつつ
「1ヶ月ぶりかな？　蘭ちゃん、俺は涼だよ」
出来るだけ笑顔で彼女に伝えるが、当たり前に疑った表情をして
「いやいやいや、涼さんは男の人ですよ。あなた女の子じゃないですか」
と、予想通りの言葉を言う
まぁ普通は疑うよ、当たり前だ　逆の立場だったら俺だって疑う
「じゃぁ、弾が知らないけど俺は知ってる蘭ちゃんの秘密をば」
弾と一夏に聞こえない様に蘭ちゃんに耳打ちをすると、蘭ちゃんは動揺して
「な、な、な、なんで涼さんしか知らない事を・・・」
と言い、どうにか信じてくれた様だ
さて、問題はここからだな
流れで一夏も女になった事を伝えて、蘭ちゃんに信じさせる必要がある
更に言えば、出来る限り弾が酷い目に合わない様に宥めなきゃいけない

五反田家　ストレート

出来る限り被害が少ない様にと考えたが、全く良い案が思い浮かばず困っていると
「・・・ウダウダしてても仕方ない、蘭よく聞け・・・　一夏も女になっちまった」
腹を括った弾が蘭ちゃんを真っ直ぐに見据えて言う
すると蘭ちゃんの表情は曇り、信じたくない　といった表情をする
それは当たり前の事だ、俺は単なる兄の友達で一夏は想い人だ、差が出て当たり前だと思う
「う、嘘・・・でしょ？　ねぇ・・・お兄!?　」
見るからに動揺し、弾の胸辺りの服を掴み揺さぶる
「嘘じゃない、一夏と涼が女なっちまった。　今、元に戻る方法を探してくれている人がいるらしい、でも・・・見つかる可能性は低いってよ」
珍しく　お兄ちゃんな弾は、蘭ちゃんへ説明をする
とりあえず弾に任せる事にして、俺は一夏の隣に戻り座り2人の様子を伺う
「でも、可能性は有るんでしょ？　」
「可能性はな？　仮に戻る方法が見つかっても、安全か確かめなきゃならないだろ？　短い期間なら大丈夫だろうけど、あまりに長い間女のままで過ごしたら男に戻る意思がなくなってる可能性も有る。お前が動揺しているのも、辛い思いをしているのは分かってるが、今1番シンドイのは一夏と涼だ　」
弾の言葉を聞き蘭ちゃんは弾を突き飛ばす様に弾から離れて部屋を出て行く
「・・・やっぱり泣いてたな？　弾」
「あぁ、知ってる」
2人で予想した通り、事実を知り部屋から自室へ戻った蘭ちゃんは

泣いていた
　きっと今は、そっとしていた方が彼女の為だろう
　1人で考える時間も必要だろうし
「とりあえず、少ししたら落ち着くだろうから後で宥めておくわ」
「そうだね、無事を祈っておくよ弾」
　蘭ちゃんが変な方向にシフトしない事を祈りつつ、弾がゲームの電源を入れ
「とりあえずゲームしようぜ？　もう時期　数馬も来るだろしな」
　弾は　そう言うと一夏がコントローラーを受け取り格ゲーを始める
　俺も一夏もゲームをする方では無いが、全くしない訳では無い。主に弾や数馬と遊ぶ時にやる訳だけど
　ゲームをしながら蘭ちゃんの心配をする、鈴は精神的に強い方だからショックは有ったにせよ、すぐに立て直して俺たちのフォローをしてくれている
　でも蘭ちゃん　は良くも悪くも年相応だ、彼女は精神的に少し脆い印象を俺は持っている
　これは時間が解決してくれると俺としては楽だ、でも　そんな事は無い
　。絶対にない
　きっと時間だけでは解決しない問題だ、元に戻る方法が　まだ見つかっていないし、仮に見つかったとして元の男に戻る意思があるか今の俺には分からない
　女体化して約2週間だが、絶対に男に戻りたい意思は無い。そもそも可能性が低過ぎるし、手掛かりすら無い状態なのだから
　はぁ・・・蘭ちゃんが変な方向にシフトしない事を本当　祈るしかない

みつだん

しばらくして数馬が合流して弾が蘭ちゃんの様子を見に行き、すぐに戻ってきて
「涼、蘭が　お前と話しをしたいって」
「・・・分かった」
なんで一夏では無く俺なのかが不思議だが、まぁ仕方ないので弾の部屋を出て蘭ちゃんの部屋の扉をノックすると、微かに入室の許可が聞こえたので入室し扉をしっかりしめ
「来たよ蘭ちゃん」
ベッドの上で膝を抱えてタオルケットに包まり座る彼女に言い、ベッド横に座る
「・・・もう、戻れないんですか？　」
先程まで泣いていたであろう蘭ちゃんは、ゆっくりと尋ねてくる
「絶対に戻れない訳ではないよ、可能性は低いけどね」
不安そうな彼女に注意しながら答える
「うぅ・・・涼さんは、不安じゃないんですか？　戻りたいと思わないんですか？　」
蘭ちゃんは少し涙を流しながら尋ねてくる
「全く不安じゃないよ、何があっても味方で居てくれる家族と頼りになる友達がいるから・・・だから俺は、不安じゃない」

あえて戻りたいか、と言う質問には答えずに蘭ちゃんを見据える
「それは、一夏さんも？　」
「さぁ？　どうかな、俺は割と自分の事は無頓着な所があるから　一夏が俺と同じかは分からない。　でも・・・多分、不安は感じてると思う」
そう、きっと一夏は不安を抱えていると思う
俺と違ってそう簡単に受け入れる事が出来るとも思えないし

「・・・多分、言わないし見せないだけで一夏は不安を感じてる、戻れるのか、戻れなかったら女として生きて行かないといけない。自分は女として生きて行けるのか・・・って少なからず考えているとは思う」
言葉だけでは不安は拭い切る事は難しい
そして　このての不安は突然に、何度でも襲ってくるだろう
だからこそ、家族と仲間が必要なのだ
「・・・そう、ですか」
そう言い膝に自分の膝に頭を乗せる蘭ちゃん、恐らくこれからの事を考えているのだろう
一夏への想いを諦めるか否か、一夏への接し方をどうするか、とか色々考えている
多分、これから先、蘭ちゃんと同じ様に悩み泣く娘が少なからず出てくるだろう
そして、一夏は都合を知らない男子に告白され、少なからず悩むだろう

「・・・分かりました、ありがとうございます涼さん」
泣いて少し目の赤い蘭ちゃんがタオルケットから顔を出して言う

「ううん、気にしないで？」
なんか腹が座った様な表情をしている蘭ちゃんに言い
「この先、何が起こるかは分からない。明日急に男に戻ってるかも知れない、戻れる方法が見つかるかも知れない、見つからず一生を女で過ごすかも知れない」
今は問題がなくても、余命が短いかも知れない。全くの偶然で事故に巻き込まれて死ぬかもしれない
だから悔いは残さずに生きて行きたい
「・・・君が悔いを残さない様に生きろ、後悔してからじゃぁ手遅れだ」
そう彼女を諭す様に言い立ち上がり
「俺は、蘭ちゃんを応援してるから」
それだけ伝えて彼女の部屋を後にする

帰宅

蘭ちゃんの部屋を出て廊下を進み弾の部屋を通り過ぎて階段に座る
我ながら大分　偉そうな事を言ってしまった、余計なお世話だったかも知れない、と少し自己嫌悪する
彼女が俺を呼んだ理由は多分、現実を受け入れたくなかったから、嘘だと思いたかったから、必ず男に戻ると思いたかったから、だ
馬鹿正直に事実を蘭ちゃんに伝える必要は無かったかも知れない、少し事実をボカす事も出来た筈だ
「・・・俺って、やっぱ中途半端だな」
それなりの炊事家事は出来るが、学力は中の中、身体能力も中の中、可もなく不可もない程度の何処にでも居る男子中学生が俺だ
と1人で反省していると、携帯からメッセージの着信音が聞こえたので携帯を取り出し見る
メッセージの送り主は千冬姉で、安否確認だった
時間を見れば、16時を過ぎていて千冬姉は心配している様だったので立ち上がり弾の部屋へ戻り
「一夏、千冬姉が心配してるよ」
「え？　あー・・・家に帰らずに来たもんな、悪い俺達帰るわ」
携帯片手に一夏へ告げると対戦中の2人に告げ立ち上がりスクールバッグを手に取る
俺もスクールバッグを持って
「じゃぁ2人共、また明日」
「また明日なー」
2人の　おー　と言う返事を聞き五反田家を後にする
「とりあえず千冬姉には、今帰るって返信しといたから」
「さんきゅー涼」
今日は女になって初めて登校した訳だから千冬姉は心配だったん

だろう、だいぶ俺達に甘いからなぁ千冬姉
春休みの間も色々と気を揉んでくれたし、悪い事したな・・・これも反省しなきゃ
とか考えて見た目が変わっても中身は自分のまま、だと改めて自覚する
まだまだ子供なんだと、認識する
途中でコンビニに寄って、千冬姉への献上品を購入して帰路を歩き１０分ほど一夏と雑談しながら歩くと家に辿り着き玄関を開けると、千冬姉がレディースーツで仁王立ちしていた
「た、ただいま」
「ただいま千冬姉」
ちょっと覇気が凄くて怯んだ俺と違い一夏はケロっとしていて靴を脱ぎ揃えて並べる
「・・・おかえり２人共、遅くなるなら連絡ぐらいしろ。お前達に何かあったら、と気が気ではなかったぞ？」
そう千冬姉は溜息を吐いてから腕組みを解き、間合いに居た一夏へ強烈なデコピン食らわせる
「・・・ごめん、千冬姉」
痛みで蹲る一夏を横目に千冬姉に謝り俺も靴を脱いで揃えてから家に上がると、目にも止まらぬ速さでデコピンされ俺も痛みで蹲る
「次からは連絡しろ、少なくとも獅郎さんにはな？　」
クッソ痛くてそれどころじゃないが、千冬姉は　そう言い階段を上がって行く
「大丈夫か、一夏」
「なんとか、頭割れてないよな？」
とりあえず互いに顔を見合わせて割れていないか確認してリビングへ行き父さんに帰宅を告げる
「おかえり２人共、デコ赤いな。まぁ正座で説教聞くよりマシって思っとけ、千冬は千冬でお前達が心配なんだよ」
ソファーで寛いでいた父さんが言う、次からは連絡をしようと決める

千冬姉のデコピンはマジで痛い

体力測定

千冬姉に額を破られかけてから約1週間が経った今日この頃、女としての生活にも慣れ始めて来た・・・と思う、うん
体育の時、更衣室で着替えるのは慣れないけど、うん
とりあえずは、制服にも下着にも慣れて来たと思う

そんな訳で、今日は一日使って使って体力測定をする事になっている
なんやかんやウチの学校は生徒数が多いし、上手く回しても待ちが発生したりするから一日掛かりになってしまう
去年の結果は、飛び抜けて高くないが低くもない程度だったのだが、女になって、その辺は変わったのか気になる
いや、まぁ身長も体重も鈴と同レベルになってるから、去年よりは下がってるだろうけど
と、まぁ憎たらしい程　晴れ渡った空を見上げつつ筆記用具　片手に体育館へ続く渡り廊下を進んでいると、背中を軽く叩かれる
「どーした涼、なんか表情が固いぞ？　」
と弾は俺の真横に立ってニッと笑み言う
「そう？　少し考え事をしてただけだよ」
既に身長が１７０を超えている弾を見上げ答え
「弾、見上げる角度が急過ぎて首痛くなるから、少し離れてよ」
とふざけて言うと弾はオーバーリアクションを取ってふざけかえしてくる
弾はなぁ見た目は良いんだけどね、うん
そんな馬鹿話をしながら体育館へ行きクラス事に整列して記録用紙が配布されたので手早く名前とクラスを記入する
とりあえずは一夏と鈴と一緒に回る事にしよう、そうしよう
先生の説明が終わり散開を命じられたので2人に声をかける
「鈴、一夏、一緒に回ろうよ。流石に・・・ね？　」

「そうね、アンタ達が固まっててくれた方がアタシもフォローしやすいし。アタシは構わないわよ」
「俺も構わないぞ、涼」
鈴っていい方が少し雑だけど面倒見が良すぎるし、一夏は一夏だし
うん、安心する
そんなこんな適当に空いてる所へ移動し、体力測定を開始する
すぐに終わる奴を、さっさと終わらせてしまった結果
握力２４．４、長座体前屈４３．１、立ち幅跳び１７０、と言う平均値超えない結果を叩き出した
まさに可もなく不可もない結果だ
「丁度、上体起こしが空いてるわ。行きましょう？」
鈴の言葉に了承して上体起こしエリアに行き
「最初は、誰やる？　」
「俺は後でも良いけど」
「なら、アタシから。次に一夏ね？　涼、足押さえて頂戴、本気で行くわ」
俺の問い掛けに２人は答え、鈴は本気でやるらしく足を押さえる様に言われたので頷き、位置に着く
「涼、カウントもお願い」
「分かった」
そういえば去年も鈴はガチでやってたっけ、見た目によらず力強いんだよなぁ鈴
と、トレード・マークのツインテールをクルクル巻いてお団子にしている鈴を見て思った

体力測定　に

本気の鈴の上体起こしの回数は平均を上回る４０回を超えた、見た目からは想像も出来ない回数だ
腹筋割れてないんだけどなぁ鈴
それから代わる代わる上体起こしをしたが、俺は相変わらず平均的、一夏は去年より少し減ってはいるが去年とあまり変わらない回数をこなした
一夏が凄いのか、俺がひ弱なのか、少し分からなくなってきた
何か始めようかな
とか考えつつ体力測定を続ける為にグラウンドへ出る
「あとはシャトルランとソフトボール投げ、５０ｍ？走　ね」
鈴が記録用紙を見ながら言う
「シャトルランは最後かな、あれめっちゃ疲れるし」
「だな～」
とはいえ、午後には持久走が待っているから楽観視も出来ないけど
これまでの結果を見る感じ、一部を除いて全体的に数値が減っている

身体は少し柔らかくなった気はする、うん
まぁ男の時も筋肉が付いてる方でも無かった、いわゆる中肉中背と言う奴だったのだけども
そんな訳でソフトボール投げと５０ｍ？走でも平均的な記録を残して、弾と数馬がバカをしてる風景を眺める
なんか、張り合ってるみたいだ
あと、何気に鈴の足が速くて驚いた。去年はタイム聞いて無かったし

そんな訳で体育館に戻り、２回へ上がる。ウチの学校の体育館は二階建てでフロアが二個有るので上下で違う活動が出来る

入学式などのもようしは講堂が有るので、そちらを使う
二階に上がると、壁際など隅で肩で息をしている生徒の姿が見えた
ん～こう汗を流してるのって青春だなって思う反面、面倒だなと感じる
そんな訳で、それなりの人数が揃ったので然程待たずにシャトルランが始まった
序盤、当たり前だが余裕で折り返し地点に到着する、鈴と一夏の表情も余裕のままだ
でも３０を超えてきた辺りから、俺は少しツラくなってきた
そして５０を超えた辺りで限界が来て、５４回で終わりを迎える
鈴と一夏は息が上がってはいるが、まだいけるようで回数を稼いでいく
俺は邪魔にならない様に壁際に移動して肩で息をしながら座り込み、２人の勇姿を眺める
本当なら２人の応援をしたい所だが、少し頑張り過ぎたせいか　そんな余裕がなく呼吸するので精一杯だった
俺の呼吸が落ち着いた頃、鈴が脱落して俺の横に座り込み悔しそうな表情で息を整えて、程なくして一夏も脱落しやり切った表情で座り込む
「お疲れ様、２人共」
「アンタもね」
俺の言葉に鈴は返事をし、まだ息が上がっている一夏は、サムズアップだけする
それから動けるようになるまで休憩していると、午前の授業の終了を告げるチャイムが鳴った
午後の持久走は嫌だな

織斑　一夏の憂鬱

体力測定から月日は流れて青葉が茂る5月になった今日この頃、衣替えが有って制服が夏服になった
この学校、男子は冬は長袖のワイシャツに学ランで夏は半袖のワイシャツだから、中間の季節は男子は長袖のワイシャツを着れるんだけど、女子は冬用のセーラー服と夏用のセーラー服の2パターンしか無いんだよね
一応、カーディガンの着用は認められているんだけど、中間の季節のセーラー服を導入して欲しい
と、女体化して思考が麻痺し始めてる俺の横で、最近三つ編みを覚えた一夏が学級日誌に頭を乗せて項垂れている
「あー・・・ドンマイ？　」
軽く肩を叩き励ますと、一夏は　ゆっくりと顔を上げ
「・・・なんで俺なんだよ」
一夏の目のハイライトが消えかけていて一夏は呟く
ちなみに原作は放課後で、教室には俺と一夏しか居ないので一夏は素の一人称である、事情を知らない人がいるときは極力男口調にならない様にしていて、一人称は私だ
俺は口調を意識して変えてはいないが、一夏同様　人がいる時は一人称を私と言うようにしている、変な詮索されても面倒くさいし
さて、一夏の目が死にかけている理由は2週間程前から毎朝の様に靴箱へ投函される様になった手紙が原因だ
「なんで俺が男からラブレターなんて貰わなきゃなんないんだ？」
「いやぁ・・・ほら、一夏は今、美少女だし？」
そう、一夏は毎日の様にラブレターが靴箱に投函され、律儀な性格が災いし指定された場所に行って直接断りを入れている
一応、弾と数馬、俺がフォロー出来る距離で付き添いをしていたが、馬鹿な事を考える輩は今の所は居ない

「同級生の中で群を抜いて美人だしね、一夏は」
見た目は美少女なのに中身が男子中学生だから距離詰め易いんだよね一夏、お人好しだから落とす対象が女子から男子にシフトした訳だ
まぁ一部女子はオチて百合になってる可能性もあるかも・・・刺されない様にしよ
俺の言葉に恨めしそうに見てくる一夏に苦笑を返し
「さ、日誌書いて帰ろ？　今日は肉の特売の日だぞ？」
憂鬱は肉を食ってれば晴れるって千冬姉が言っていたので、晴れるんだろう、多分
俺の言葉を聞き一夏は　ゆっくりと学級日誌を開き書き込んでいく
俺は一旦一夏から離れ窓際に行き、外を眺めて考える
この先、一夏への告白は間違いなく続いていく、弾や数馬が居ない場面もあり得るし、鈴は女の子でいくら腕っ節が強かろうと男子に絶対勝てるとは言えない
だから、最低限の身の安全を確保出来る程度に自衛出来る術を手に入れる必要がある
道具なり、技術なりが必要だ
習おうかな、護身術

黄金の大型連休

学生の皆が待ち望んだ大型連休が到来して俺達は例に漏れず連休の為、家にいる
千冬姉の転職先は連休中でも忙しい様で今日も元気に千冬姉は出勤して行った、職種は何にも言わないけどＩＳ関連の仕事なのは間違いないと思う、その道のプロな訳だし
そんな訳でリビングで一夏と焙じ茶を飲みながら話をしている
「少し前から考えてた事なんだけどさ、何かしら護身術なりを身に付ける必要がないかな？」
「護身術？　なんで？」
まさに必要性を感じていないのか俺の言葉に一夏は変な表情をする
「・・・一夏、最近よく告白される様になったじゃない？　実は念の為に弾と数馬にお願いして見張りして貰ったりしてたんだよ、力尽くで～とか考える奴を警戒してね」
一夏に内緒で２人にはお願いしていたし、一夏は気付いていなかった様で驚いた表情をする
この世界は平等には出来ていないし、綺麗事だけで出来ていない。俺と一夏は　よく知っている、約１年前に千冬姉のモンドグロッソ二連覇を阻止する為だけに誘拐されたのだから
「俺だって、一夏に好意を抱いた人に　そんな人間が居ないと思いたいけどね？　何事も最悪は想定しておいて損は無い、だから護身術か何かを身に付けておきたいんだ。それに身体を動かすのは健康にもいいしね」
一夏を真っ直ぐ見て言うと、一夏も真面目な表情をして考える
「なるほど、健康維持と自衛か・・・一石二鳥だな。でも毎日は無理じゃ

ね？　」
　一夏は健康と聞いてヤル気を出した様子で言う
「それは条件に合う場所を探せば良いんじゃない？　まずは何を習うか決めないと」
　護身術と言っても実質何も分からない、打ち合う様な物は今の俺達には不向きって言うか前提から変わってるので投げたり逃げる隙を作れる物が望ましい
「とりあえず調べてみようか」
　携帯でＧｏｏｇｌｅを開いて近所で護身術か護身術になりそうな武術を探す

　んー、よく分からん
　やはり道具を用意した方が良いか？　とか考えているとインターフォンが鳴ったので出ると
「やっほー、りーちゃーん、いーちゃーん、遊びに来たよー」
　なんとも都合よくウサミミアリスが現れたので家に招き入れ、リビングに案内して焙じ茶を出す
「一月（ひとつき）ぶりだね？　何か変わった事がないか見に来てみたのだけど・・・なんか悩み事？　」
　何も言っていないのに俺達の顔を見て何故か分かる束さんは凄いなと思い、遠慮なく相談すると　ウンウンと頷いて
「法律に引っかからずに身の安全を確保出来る道具と護身術が必要なんだね？　束さんに任せてよ　」
　にぱーと満面の笑みを浮かべ束さんは自信満々に言い切る
　おかしいな、暴漢対策に道具か護身術を探してるって言っただけなんだけど

第４の試練

　束さんに近況を色々と話した翌日の昼下がり、鈴が我が家を訪れ

「授業用の水着を買いに行くわよ」

　と、仁王立ちで玄関先に立ち言う

「え？　プール開きまで一月（ひとつき）ぐらい有るよね？　」

　流石に面食らってしまい、疑問を投げかけると

「プール開き自体はね、でも　その前にプール掃除が有るわ。体操服を着てやるけれど、少し濡れたら透けるわよ？」

「なるほど」

　俺はあまり気にしないけど、一夏辺りは男子の目に毒だろうな。何気に一夏はスタイル良いし

「分かったら準備して来て、一夏も連れてくる様に」

「了解、一夏が渋らない事を祈ってて」

　玄関から二階へ上がり一夏の部屋の扉をノックし用件を伝えると、微妙な表情をして渋々準備を始める

　それを見て俺も自分の部屋へ戻り機動性を重視して服を選んで着替えて玄関へ戻る

「鈴お待たせ、一夏は渋々準備してるよ」

「そう、説得に時間が掛からなくて良かったわ」

　と鈴は携帯を見ながら答え

「学校指定の水着が売ってるお店は駅前にあるわ、近場の方が良いでしょ？」

「あぁ、あそこか」

　去年　水泳の授業で使った水着を買ったのも駅前のお店だったので覚えている

　スポーツ用品のお店で、色々と売っていた筈だ

　しばらくして一夏がジャージ姿で現れ、鈴がため息を吐き

「色々言いたいけど、まぁいいわ。行くわよ？」
そんな訳で鈴の先導の元、水着を買いに行く旅？は始まった
「ほんと、千冬さんがアタシに連絡してきた意味がよく分かったわ。千冬さんに感謝なさいよ？」
「千冬姉に？」
「なんでだよ」
鈴の言葉に首を傾げて尋ねる
「いい？　千冬さんはアンタ達がプールの授業の前準備とか全くしていないと予想していたのよ、獅郎さんは男親だし気がつかないだろうからって」
それなら面と向かって言って欲しい　とか考えたが、千冬姉は忙しいからあまり話す時間も無いし、逃げる可能性も考慮したんだろう
で抜擢されたのが鈴な訳か
「なるほど、ありがとう鈴」
「さんきゅー」
２人で鈴にお礼を言う、あとで鈴に何か奢る事にしよう
そんなこんな駅前へ移動して件のお店へ辿り着き看板を見上げ
「着いたね、一夏」
「・・・着いてしまった」
「行くわよ、ほら」
俺の言葉に嫌そうな表情をしている一夏の背中を鈴が押し入店する、この辺りでは大きいお店で品揃え豊富な為、俺と鈴の２人で一夏を強制連行に近い形で目的の区域まで連れて行き
「ほら、さっさと自分の奴を見つけてきなさい」
嫌そうな一夏を離し逃がさない様に監視しながら鈴が言う
最近、全く抵抗がなくなってきた俺はサイズのタグを見ながら探す
頑張れ一夏、お前なら出来る